

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 29 年 6 月 14 日現在

機関番号：15101

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25284093

研究課題名(和文)日本語教育における協働学習の実践・研究のアジア連携を可能にするプラットフォーム構築

研究課題名(英文)Platform Development for Practice and Research on Collaborative Learning among Asian countries through Japanese Language Education

研究代表者

池田 玲子 (IKEDA, REIKO)

鳥取大学・学内共同利用施設等・教授

研究者番号：70313393

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 10,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、日本で提案された日本語教育の協働学習の実践研究をアジア各地域において推進していくために、アジア各地域にプラットフォームを構築することを目的とした。

本研究の成果として、中国では独自に教師研修の場を創出し、恒常的な運営を展開しつつある。また、協働学習の実践研究のための研究書の出版を日本との協働により実現した。韓国でも研究成果をまとめた出版書の計画が進みつつある。台湾では国内研修やアジア他地域との協働研究を実現させた。モンゴルでは、他の外国語教育との協働による実践研究へと発展させることができた。タイ、マレーシア、インドネシアでも、現地教師のための研修の開催など独自の活動を展開している

研究成果の概要(英文)：The project aimed at developing the platform in Asian countries in order to promote collaborative learning for practice and research through the Japanese language education initially proposed in Japan.

As results of this project, collaborative learning on practice and research has been expanded in China, South Korea, Mongolia, Thailand, Malaysia, and Indonesia. In China, for instance, the opportunities for teachers training on their own has been emerged and operate in a constant manner. In addition, a research book on practice and research on collaborative learning was published with the collaboration of Japan. In South Korea, another publication that summarizes the research results is now in progress. In Taiwan, domestic training and cooperative research with others Asian countries has been conducted. In Mongolia, on the hand, collaborative research was carried out on the practice Japanese language and other foreign language education. Finally, other platforms are now in progress.

研究分野：日本語教育学

キーワード：協働学習の実践研究 アジアの日本語教育 プラットホーム構築 アジアの教育背景 プラットホームの発展

## 1. 研究開始当初の背景

グローバル時代をむかえた現代社会では、人と人とが協働することの重要性が様々な分野で叫ばれるようになった。教育分野でも世界の広い範囲にわたって大きな変革が起きており、従来型の固定的で一方的な教師主導型教育から学習者の主体的・自律的学習環境作りが重視されるようになった。こうした教育の考え方として「協働学習」があり、これへの関心が高まりつつある。協働学習への注目の理由は、教育実践を支える認知科学など学習についての研究の発展から見出されたことであり、協働学習の理念が現代社会の求める人間像の育成に合致していることもある。つまり、協働学習は、現代の人間社会の要請に応えるものだといえる。しかしながら、アジア地域では、協働学習を発展させていくための実践・研究の環境整備がまだ十分である。

そこで、2004年以降、代表者らは教師研修などを通じて日本語教育の協働学習を海外に向けて発信してきた。ここから分かったことは、現地で開催したシンポジウムやワークショップへの参加、あるいは日本への留学や研修参加だけでは、現地の実践・研究の環境づくりへと発展することはないという事実である。ここには、現地の環境整備のために、日本からの継続的なサポートや現地特有の教育背景を十分に理解した上での改革の検討が必要となってくる。

## 2. 研究の目的

本研究は、これまで代表者らが展開してきた日本語教育の協働学習の実践・研究を、他のアジア地域においても推進していくことにより、日本語教育の協働学習の有機的な発展を促進させることを目的とするものである。日本語教育の協働学習は、近年では東アジアや東南アジアでもにわかに関心が高まってきた。しかし、各地域内で有機的に実践・研究を展開していくのに必要な体制づくりが未整備である。そこで、代表者を中心とした「協働実践研究会主要メンバー」は、国内と海外からの協力を得て、アジア地域の研究協力者の連携体制づくり、現地での研究活動(シンポジウム・研究会などの開催)およびITを通じた協働実践・研究を可能にするためのプラットフォーム構築を目指した。

【課題1】: アジア地域での協働学習の実践・研究の現状把握

【課題2】: アジア各地と日本の協働実践研究会とのネットワークシステムの形成

【課題3】: アジア地域の各国内での協働実践研究推進のための組織化

【課題4】: 日本とアジア各地との協働実践研究のための連携活動の具現化

【課題5】: アジアにおける協働学習推進のための研修プログラムの開発

【課題6】: アジア5地域の拠点拡大と発展

【課題7】: 協働学習研究に関する海外連携

## プロセスモデル化と他領域への発信

### 3. 研究の方法

第一に、アジア地域の日本語教育現場の現状の把握(実践者の認識、教師観、学習観、学習者の期待やニーズ、教育制度など)のために、プロジェクト開始年度に日本でシンポジウムを開催し、各地域の日本語教育状況を把握した。

第二に、プロジェクト開始以後のアジア地域での実践・研究の経過を調査するために、各地域の拠点ごとに協働実践研究会支部としてHPリンクの方法で、研修や研究会開催情報を公開できるようにした。

第三に、海外プラットフォーム構築を具体的に進めていくために、日本との協働による教師研修会や実践発表会をアジア地域で共催した。

第四に、アジア地域の協働学習研究を有機的なものとしていくために、現地拠点での研究会・研修会に、他地域の実践研修者を招聘し、自国状況の報告や共同研究課題の検討を行う機会を設けた。

第五に、各拠点の組織化、実践研究の現況からプラットフォーム構築段階を判断し、拠点独自の活動展開モデル化の課題を設定した。

第六に、海外プラットフォーム構築のプロセスモデル構築の要因となったものを特定化するために、これまでの海外発信の機会の記録(報告書、HP公開情報、研究論文など)の整理を行った。

### 4. 研究成果

本研究は、日本で提案された日本語教育の協働学習の実践研究をアジア各地域において推進していくために、アジア各地域にプラットフォームを構築することを目的とした。

以下、本研究の成果として、各プラットフォーム構築の経緯と現段階の実情を報告する。

#### (1) 中国

中国での拠点づくりのための活動は、北京、青島、大連、浙江、重慶を計画した。プロジェクト実施期間中には、中国の中心となる北京での活動がもっとも活発に展開した。北京での活動には、国際交流基金の日本語教師と北京日本語教師会との連携も可能となった。その結果、2015年には本研究代表者を含む2名の日本メンバーと北京の研究者2名との共著による協働学習の研究書を中国で出版するに至った。北京拠点では、教師研修を定期的に開催し、中国の日本語教師の協働実践研究力を大きく向上させることができた。北京拠点のメンバーによる成果報告(研究論文・実践報告等)については、国内はもとより、海外でも発表することができた。また、継続的な研究会の実施および論文による発信が可能な段階まで進んだ。この拠点は、最も発展した海外拠点モデルとして提示する。

大連、青島の両拠点での活動は、実践者の実践研究を協働的に進めていく方向で進ん

だ。浙江、重慶については個人の研究に留まっている。北京以外の拠点については、今後の発展を支援するサポートのあり方を検討することが課題として残った。

#### 【中国拠点の主な成果】

研究会・セミナー 2回(2015、2013)

出版

池田玲子・館岡洋子・朱桂栄・林洪 著  
(2014)『日語協作学習 理論と教学実践』

中国高等教育出版社

主な論文

菅田陽平・駒沢千鶴(2016)「中国の大学日本語教育における教具フリップを活かした教室活動」『言語教育実践 イマ×ココ』第4号 査読付

発表(海外)

日本協働実践研究会 2017年2月口頭発表  
日本語教育世界大会 Bali (Indonesia)

2016年9月口頭発表

日本協働実践研究会 2016年2月口頭発表  
研修会・勉強会 2015年より定期開催

#### (2) 台湾

台湾拠点は、当初は台北の銘傳大学に設立した。その後、一部の研究会メンバーの移動に伴い、台中の東海大学にも第二拠点を設立することができた。現在までの台湾拠点が行った活動としては次の4つがある。第一に実践研究者のための研修会を定期的開催し、これを継続していること、第二に、国内での成果発表(論文・口頭)を行ったこと、第三に、海外への発信(日本・タイ・インドネシア)を行ったこと、第四に、協働実践をテーマとした国内の研究助成金を獲得し、台湾拠点主催の研究大会が開催できた。台湾拠点は、この4年間で活発な活動を展開したことに加えて、国内2拠点間の協働による実践研究を進める体制づくりができたところに特徴があり、国内拠点の拡大を可能にしたモデルとして提示できる。

#### 【台湾拠点の主な成果】

研究会・セミナー 2回(2017、2014)

主な論文

羅曉勤(2014, Dec). ルーブリック評価の導入とピア・レスポンス活動の変容とのかかわり - 「日本語作文(二)」という実践フィールドを通して - . 台湾日本語文学報, 36期, 275-300. 査読付

研修会・勉強会

2014年~現在まで定期開催(月1回)

発表(海外)

タイ協働実践研究会 2016年9月口頭発表  
日本語教育世界大会 Bali (Indonesia)

2016年9月口頭発表

日本協働実践研究会 2015年2月口頭発表

#### (3) 韓国

当初はソウルの弘益大学に拠点を設けたが、代表者の移動があり、ソウルの梨花女子大学に移した。韓国拠点の活動は、日本語教

師会と日語教育学会との協力のもとに展開することができた。具体的には、日本語教師会の教師研修のテーマとして協働実践研究を取り上げた回を実施する、あるいは韓国日語学会の大会テーマとして協働実践を2年連続で取り上げることができ、韓国の日本語教育分野全体への周知度を飛躍的に高めることができた。また、韓国拠点の代表メンバーの一人が日本の研究奨学金を獲得することができ、日本での協働実践研究を行うことができた。これをきっかけとして、韓国での協働実践研究を日本や他のアジア拠点(インドネシア)で発信を行うことができた。

#### 【韓国拠点の主な成果】

研究会・セミナー 2回(2015、2013)

主な論文

金志宣(2015)「ピア・ラーニングにおける教師の役割 - 学習者の内省記録から - 」『日本語教育研究』第32輯、23-37. 査読付

倉持香・奈呉真理・関陽子(2015)「大学教師の日本語学習に対する意識 - 韓国の教養日本語科目におけるグループワークに焦点をおいて - 」韓国日語教育学会2015年度第28回国際学術大会口頭発表

#### (4) モンゴル

モンゴルの拠点はモンゴル国立教育大学に設けた。この地域は大学が一箇所に集中した地理的状況であるため、大学間の連携がしやすい環境である。また、大学内の日本語教育の位置づけについても、東アジア地域の状況とは異なり、アジア言語としての纏まりではなく、外国語教育という大きくくりの中にある。このことが日本語教育と他の外国語教育の連携を容易にしている。したがって、本拠点での研究会や研修の開催には、日本語教育の現場教師が参加しやすく、同時に他分野と連携協働もしやすい環境だった。

実際、モンゴル拠点での協働実践研究の紹介は、現地での研究会2度目の開催にして、はやくも他分野(英語教育・中国語教育)との連携が可能となった。また、小規模ではあるものの、拠点メンバーを中心とした日本語教育関係者の協働活動の推進については展開が速く、定期的な研究会、研修の実施とともに、現地の教育事情を踏まえた独自の協働学習の教室教材、研修会用の資料作成に取り組むことができた。

従って、本拠点での活動は、小規模な形での活動展開と他分野との連携協働を可能にするモデルとして提示することができる。

#### 【モンゴル拠点の主な成果】

研究会・セミナー 1回(2013)

#### (5) タイ

プロジェクト立ち上げの時点でタイ拠点をタマサート大学においた。その後、本拠点に限らず、近辺での協働学習をテーマとした

研修、研究会の開催を行ってきた。しかし、日本語教育だけでなく、タイの教育全般の状況はといえば、教育改革については、いまだ大きな課題として認識されてはいない状況であるようだ。本プロジェクトの調査では、新たなニーズ把握が困難であった。そうした中で、中国拠点からタイ拠点へと移動した本プロジェクト協力者が、タイの協働実践の新たなキーパーソンとなり、近い将来のタイの教育改革の必要性を伝えた。そこで、他のアジア拠点のような時間をかけた緩やかな推進方法ではなく、段階を超えた働きかけを行った。日本と他のアジア拠点との協働開催による国際研究会の開催を実現した。ここに日本からは本プロジェクトメンバーの数名が参加し、台湾拠点、マレーシア拠点からもメンバーが加わり、日本、台湾、タイ、マレーシアの4拠点の代表者たちがタイでの協働実践研究会に参加する形で実施できた。

よって、タイ拠点での活動の推進は、現地の環境変化が伴わない中で、将来的な課題を想定した上で行う加速的構築モデルとして提示することができる。

#### 【タイ拠点の主な成果】

研究会・セミナー 1回(2015)

#### (6) マレーシア

マレーシアの拠点は、クアラルンプールのマラヤ大学に設立した。数年前に存在した日本語教師会は休止状態だった。しかし、新任教師や日本人教師には自己研鑽の場が求められていた。そこで、周辺の日本語教師への研修会再開の名目で「協働実践研究」をテーマとした会を開催し、これをきっかけとして、以後、日本のプロジェクトメンバーの支援のもと協働実践研究会をこれまでに3回開催でき、さらに、この3年間では現地教師に向けた研修会を年2回開催している。

3年目には代表者がインドネシアやタイ拠点への情報提供を行っている。クアラルンプール拠点については、現地の実践研究の場が求められるタイミングでの設立と近隣国への有効な支援が可能となったケースとしてモデル化できる。

#### 【マレーシア拠点の主な成果】

研究会・セミナー3回(2016~2014)

主な論文

木村かおり、ウー・ワイ・シェン(2016)

「ローカル教師と日本人教師が実施するピア・カンファレンスがもつ可能性 - 自己研修型教師をめざす AR の報告から」第13回マレーシア日本語教育国際研究発表会、October 2016, at AAJ, PASUM, Malaysia

研修会・勉強会

2013年~2016年 全6回

#### (7) インドネシア

ジャカルタのアルアザール大学に協働実践研究の拠点を設立することができた。ジャカルタ拠点では、日本語学習者の急増の状況

にあり、大学での教育方法の転換に関心が高まっていた。さらに、28年夏には日本語教育世界大会が予定されていたため、教育方法について海外からの注目もあった。

インドネシア拠点の主要メンバーは現地実践研究者であり、日本語による研究論文のサポートが必要であったので、現地日本人教師の協力や隣国のクアラルンプール代表者からの支援のもと、日本語教育世界大会を目標とした研修会を短期間に4回実施した。

この拠点の設立経緯については、国内外の支援のもと、現地日本語教育への注目が高まるタイミングで協働実践の推進を進めることができたケースとしてモデル化できる。

#### 【インドネシア拠点の主な成果】

研究会・セミナー 2回(2015)

発表(海外)

日本語教育世界大会 Bali (Indonesia)

2016年9月口頭発表

研修会・勉強会 4回(2015~2016)

#### (8) キルギス共和国

キルギス共和国の拠点は首都ビシュケクにあるキルギス国立総合大学に設立した。現地で開催した教師研修の場で把握できた状況は、現地教師の中に日本留学中に協働学習者や協働実践関連の情報をすでに持つ教師が存在したことである。ただ、社会主義国としての長い歴史の中で、教師主導の教育観が根強くあることは否定できない。こうした状況にもかかわらず、現地での協働実践研究の紹介後には、現地教師からの協働学習の取り組みについて質問のメールがあったことや一人の現地人日本語教師が近い将来に日本留学を検討したいという問い合わせもあった。わずかではあるが、本推進の活動成果としてこれらを取りあげることができる。

この地域の拠点構築については、社会文化的観点から教育改革がおきにくい地域での取り組みモデルとして提示できる。

以上、本研究の7つの研究課題は、ほぼ達成できた。中でも、研究プロジェクト開始当初に目標として掲げたアジア5地域のプラットフォーム構築に加えて3地域を設立し、最終的に8地域での拠点構築ができた。また、プラットフォームの発展状況についても、目標とした段階を超えた地域があり、これらは本研究の成果として特筆できる部分である。

#### 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計3件)

館岡洋子、日本語授業における協働の学びの場のデザイン、日本語教育研究、韓国日語教育学会、寄稿、2016、7-21

池田玲子、協働実践研究のための海外プラットフォーム構築 - アジアでの活動に向けて -、言語文化と日本語教育第50号、お茶の水女子大学日本言語文化学研究会、寄稿、2015、38-50

池田玲子、グローバル社会におけるアジアの日本語教育への提案、日本語教育研究、韓国語教育学会、寄稿、2014、7-24

〔学会発表〕(計3件)

池田玲子・張楡珊・木村かおり・アリアントピシアティ(2016)「アジアの協働学習の実践研究を支えるプラットフォームの構築」日本語教育国際研究大会、Bali (Indonesia)

広瀬和佳子・館岡洋子・池田玲子・朱桂栄(2016)「協働の学びを捉え直す」日本語教育国際研究大会、Bali (Indonesia)

岩田夏穂(2016)「中央・南アジアの日本語教育における協働学習の実践の現状とプラットフォーム構築の可能性」日本語教育国際研究大会 Bali (Indonesia)

〔図書〕(計3件)

近藤彩・金孝卿・池田玲子、ビジネスコミュニケーションのためのケース学習、ココ出版館、2015、120

館岡洋子 編著、協働で学ぶクリティカルリーディング、ひつじ書房、2015、121

池田玲子・館岡洋子編著、日語協作学習理論と教学実践、中国高等教育出版社、2014、271

〔その他〕

(1) ホームページ

協働実践研究会 各国プラットフォーム  
[http://kyodo-jissen-kenkyukai.com/?page\\_id=9](http://kyodo-jissen-kenkyukai.com/?page_id=9)

(2) 海外拠点の企画研究会

【中国】

北京協働実践研究会 2014年4月27日  
(北京師範大学)

中国日本語教師セミナー2013年9月8日  
(北京国際交流基金)

【台湾】

台湾協働実践研究会 2017年3月(台湾国際交流協会)

台湾協働実践研究会ワークショップ  
2014年11月8日・9日(国際交流協会)

【韓国】

韓国協働実践研究会 2015年12月(弘益大学)

韓国協働実践研究会 2013年12月(建国大学)

【マレーシア】

KL 協働実践研究会開催セミナー  
2014年9月5日・6日(マラヤ大学)

KL 協働実践研究会開催セミナー  
2015年9月4日(マラヤ大学)

KL 協働実践研究会開催セミナー  
2016年8月26日・27日(マラヤ大学)

【インドネシア】

ジャカルタ日本語教師年次セミナー  
2015年9月19日(アルアザール大学)

【モンゴル】

モンゴル協働実践研究会 2013年4月1日  
(モンゴル国立教育大学)

【タイ】

バンコク協働実践研究会 2015年9月5日

6. 研究組織

(1) 研究代表者

池田 玲子 (IKEDA, Reiko)

鳥取大学・国際交流センター・教授

研究者番号：70313393

(2) 研究分担者

館岡 洋子 (TATEOKA, Yoko)

早稲田大学・日本語教育研究科・教授

研究者番号：10338759

近藤 彩 (KONDOH, Aya)

麗澤大学・外国語学部・教授

研究者番号：90377135

金 孝卿 (KIM, Hyogyung)

大阪大学・国際教育交流センター・特任准教授

研究者番号：30467063

岩田 夏穂 (IWATA, Natsuho)

政策研究大学院大学・政策研究科・准教授

研究者番号：70536656

トンプソン 美恵子 (THOMPSON, Mieko)

早稲田大学・日本語教育センター・准教授

研究者番号：20401606

房 賢嬉 (BANG, Hyeonhee)

国士館大学・アジア・日本語研究センター・客員研究員

研究者番号：60625002

(4) 研究協力者

朱 桂栄 (ZHU, Guirong) 中国

菅田 陽平 (SUGETA, Yohei) 中国

駒沢 千鶴 (KOMAZAWA, Chizuru) 中国

劉 那 (LIU, Na) 中国

穆 紅 (MU, Hong) 中国

羅 暁勤 (LO, Hsiao-chin) 台湾

張 楡珊 (CHANG, Yu-San) 台湾

荒井 智子 (ARAI, Tomoko) 台湾

金 志宣 (KIM, Jisun) 韓国

倉持 香 (KURAMOCHI, Kaori) 韓国

曹 英南 (CHO, Young nam) 韓国

木村 かおり (KIMURA, Kaori) マレーシア

Neancharoensuk Suneerat タイ

Ariant Visiaty インドネシア

Usenova Jarkyn キルギス共和国

ナイダン・バヤルマ モンゴル

